家なき男

○新幹線・二人座席の窓際（朝）

山本和夫（４２）、缶コーヒーを手に、
新聞を読む。
朝早いためか、乗客はまばら。
新幹線車内放送「今日も新幹線を御利用下さ
いましてありがとうございます。
この電車は、ひかり新大阪行きです。
途中の停車駅は、静岡、浜松、名古屋です。
名古屋を出ますと、終点新大阪まで各駅に
停まります。」
和夫、読み終わった新聞をたたみ、
ショルダーバッグへ。
残ったコーヒーを飲み干す。
腕を組み、見るともなく外を眺める。
その内ウトウトし始める。

（回想はじまり）

○和夫の骨董店。青雅堂（せいがどう）・外観

○山本家のダイニング・キッチン（朝）

テーブルを挟んで和夫と妻栄子（３９）

トーストとコーヒーと、ゆで卵。

和夫「あの、サラダないの？　」

栄子「無いわよ、いるの？　」

和夫「できれば」

栄子「それなら自分で作りなさいよ」

和夫「・・うん」

テレビが朝７時の時報を。

和夫、台所の隅に積まれたダンボールの山を指さして、

和夫「ちょっと、奥さん。

あのテレビショッピングの山どうにかならない？　」

栄子「どうにかって、どうするのよ」

和夫「だから、なんでもかんでも買うのはやめなさいよ。

結局使わないんだからさ」

栄子「何言ってんの。
ほら（パン焼き器の箱を手に取って）これ、パン屋さんがつぶれたら困るじゃないの。
私は先々のことを考えて買ってるの」
和夫「（ブツブツと小声で）ヤマザキがつぶれるはずないんだけどなぁ」

玄関の戸がガラガラと開く音。
バタバタと足音がして、娘の花（１６）入ってくる。
茶髪に濃い化粧。
トーストを一枚つまんで、出ていこうとする。
和夫「これ、花。
一体昨日はどこで泊まったんだ」
花「どこでもいいでしょ。
父さんには関係ないんだから」
和夫「関係ないはずないだろ。
お前になにかあったら困るだろう」
花「困りません。

ほっといて」
花、戸をバタンと閉めて２階に。
和夫「困ったやつだなぁ。
あんたもなんか言ってくれよ」
栄子「私はとっくに諦めてます」
ため息をつく和夫は食器を流しへ運び、
丁寧に洗い、食器かごへ。
和夫「じゃ、行ってくるから」
栄子「台風で新幹線止まってない？　」
和夫「いや、そんなはずない」
栄子「帰りは何時？　」
和夫「オークションに出てくる骨董の数次第
だから、もしかしたら大阪で泊まるかも」
栄子「電話入れてよ。
ごはんの用意があるから」
和夫「うん」
バッグを持って部屋を出ようとすると
栄子「ちょっと。
てるちゃんのごはん、運んどいて」
和夫「了解」

お盆に載った朝食を両手に２階へ。

○同・２階・長男照彦（１９）の部屋の前（朝）

和夫「てるちゃん、ごはん置いとくよ」

立ち去ろうとする和夫。

突然戸が開き、髪ボウボウで無精ひげの照彦が顔を出し、陰険な表情で和夫を睨みつける。

アッと驚き、尻餅をつく和夫。

（回想終わり）

○ＪＲ身延線鰍沢口駅のホーム（夜）

ベンチで目を覚ます和夫。

怪訝な表情であたりを見回す。

人気のない夜のホーム。

腕時計を見ると８時３０分。

和夫「いったいここは？　　」

立ち上がり、駅名表示を見て驚く。

和夫「鰍沢口？　　」

しばらく考え込んで改札へ歩き出す。
無人駅で、駅員はいない。
ポケットから新幹線の切符を取り出し、切符入れに投入。

○鰍沢口駅の外（夜）
誰も居ない。
和夫M「なんでこんな所へ来ちゃったのか。訳が分からん。仕方ない、実家に泊まるとするか」
見回すと、タクシー会社の電話番号の看板が。
携帯を取り出し、電話を掛ける。
和夫「ああ、もしもし、鰍沢口に居るんだけど、一台頼めない？　　」
タンシー会社受付の声（６５）「はい、１０分ほど掛かりますが、よろしいですか」
和夫「はい、お願いします」
電話を切る和夫。
程なく車が来る。

乗り込む和夫。
和夫「最勝寺までお願いします」
運転手（６５）「へえ」
タンシーは出発する。

○タンシーの中（夜）
和夫「参っちゃったよ。
新幹線で寝過ごして、気が付いたら鰍沢。
身延線に乗り換えたのも覚えてない」
運転手「そりゃあ、たまげだねぇ。
お客さん、酒飲まさっしゃたかね」
和夫「いいや飲んでない」
運転手「へえ」
１５分ほど行くと左にコンビニが。
和夫「あ、そこで止めて。そこから歩くから」
運転手「はい、あんがとございました」
和夫、金を払って降りる。

○コンビニ店内（夜）
店員「いらっしゃいませ、こんばんは」

和夫、弁当ショーケースに直行。
和夫「明日の朝の分も・・・と」
おにぎり各種６個。
さらにビール２缶と、ウィスキー一瓶
とポテトチップスを１袋をかごに。
店員「お箸はお付けしますか？　」
和夫「いや、けっこうです」
店員「カードお持ちですか？　」
和夫「ありません」
和夫、支払いを済ませて外へ。
店員「有難うございました。
またどうぞお越しくださいませ」

○コンビニ外（夜）
和夫、歩き出す。

○和夫の実家の一軒家・外観（夜）
明かりがともっている。
和夫「え？
誰もいないはず・・・」

いぶかしみながらも、呼び鈴を押す。
中から人が走ってくる音が。
引き戸が開いて女が出てくる。
あっと驚いたあと、なんとも表現しがたい複雑な表情を漂わせる女。
山本京子（もうひとりの和夫の妻・４２）
「おかえりなさい」
和夫「え？　」
奥から２人の子供が駆けてくる。
京子、和夫の背中を押して中に入れ、
引き戸に鍵をかける。

○同・玄関内（夜）
長男秀夫（８）「お帰り、お父さん」
長女よしこ（６）「お父さん、お帰り。
さあ、早く」
子供たち、秀夫の手を取り引っ張る。
秀夫、靴を脱ぐ間もあらばこそ、
居間に連れていかれる。

○同・居間（夜）
京子、扇風機を和夫に向ける。
京子「ごはんまだなんでしょう」
と言いつつ棚からカップ麺を取って
ポットのお湯を注ぐ。
和夫「あの・・・」
京子「あなたが生活費入れてくれないから、
こんなものしかないけど。
秀ちゃん、お父さんのお箸持ってきて」
秀夫「はーい」
よし子「私がとってくるぅ」
ふたりで箸を持ってくる。
よし子「はい、お父さん」
和夫「ああ、ありがとう、だけど・・・」
京子の肩に手を置いて、一心にカップ麺
を見つめる子供たち。
京子「あんたたち、もう寝る時間でしょう」
返事をせずに、ゴクリとつばを飲み込む
子供たち。
京子、重い咳をする。

京子「さあ、どうぞ」
ふたを取り、かき混ぜて和夫の前に。
和夫M「あ、この子たち、お腹をすかせて
いるんだ。
この子たちが空腹ということは、このお母
さんは、もっと・・・」
和夫「あのね、君たち。
台所から、自分のお箸とお椀を持っていら
っしゃい」
秀夫「はーい」
よしこ「はーい」
駆けだして、お箸とお椀を手に、その
場にぺたんと座る二人。
和夫、カップ麺をかき混ぜて、麺をす
くい、２つの椀によそってゆく。
京子「ちょっと、それはあなたの・・・」
和夫「さあ、どうぞ」
秀夫「いっただきまーす」
よしこ「わたしも」
和夫「そうだ、もらってきたおにぎりがある」

と。レジ袋から6個のおにぎりを取り出し、机に並べる。

和夫「さあ、どうぞ」

最初キョトンとしていた子供たちは、我先にと手を伸ばす。

和夫「一人2個づつだよ」

よしこ「お兄ちゃん、わたしサケがいい」

秀夫「僕が先に取ったからだめ」

よしこ「お母さん！」

京子「秀ちゃん、あなた大きいんだから我慢しなさい」

秀夫、悔しそうにサケをよしこに渡す。

秀夫「クソッ」

和夫「兄ちゃん、クソッて言っちゃあいけないんだよ、汚い言葉だから。どうしても言いたかったら、（うんこ）って言いなさい」

秀夫「うんこ、うんこ」

よしこ「うんこ、うんこ」

京子まで笑い出す。

京子「何言ってるんだか」
和夫、残った２個のおにぎりを京子に。
和夫「美味しくないかもしれないけど、あなたもどうぞ」
京子「・・・ええ、ありがとう。
でもあなたの分が」
和夫「私はさっき食べてきたから」
和夫、ビールを取り出し、
和夫「コップ２つ貸してくれませんか」
京子、後ろの食器棚からコップを渡す。
和夫、ビールを開けて、２個のコップに注ぎ、京子に一杯を渡す。
京子「あなたどうぞ」
和夫「もう一本あるから」
そう言ってビールを飲む和夫。
和夫M「すきっ腹にはこたえるなあ」
黙々とおにぎりを頬張る子供たち。
時々目を上げては和夫に笑いかける。
胸が熱くなる和夫。
和夫「食べ始めてからこんなこと聞くのは

遅いんだけど、この子たち食物アレルギーは、大丈夫ですか」
京子「大丈夫。
知ってるでしょう、そんなこと」
和夫「ああ、お茶、お茶。
忘れてた」
と言って、ペットボトルのお茶を
取り出し、京子に渡す。
京子、２つの湯飲みに少しお茶を入れ、
二人の子供に渡す。
よしこ「ショクモツアレルギーってなに？」
京子「卵なんか食べたらかゆくなる病気」
よしこ「ふーん。
よしこ、かゆくならないもん。
すごいでしょ」
和夫「すごいね」
秀夫「ああ、美味しかった。
お母さん、もう眠いよぅ」
京子「さあ二人とも歯を磨いてからふとんに

入りなさい。
後で母さんも行くから」
秀夫「お休み」
よしこ「お休みなさい、お父さん」
和夫「はい、お休みなさい」
部屋を出て、洗面所へ。
そして隣の夫婦の寝室へ。
そっと襖を閉める秀夫。

和夫、正座して居住まいを正し、両手を付いて頭を下げる。
和夫「申し遅れました。
私は山本和夫と申します」
京子「何言ってるの」
和夫「この家は私の実家で、両親が死んで、今はもう誰も住んでいないと思っていたんです。
ところがあなた方がいて、あれよあれよという間に、ここへ上げていただいて恐縮しています。

この家は、私の姉からお買いになったんですか？

それと、子供たちが私のことを（お父さん）と呼びましたが、すごく戸惑っております。なにか理由でもあるのですか？　」

京子「理由って・・・」

和夫「私を父親にしなければならない、なにか特別な事情でも・・・」

京子、わきの棚に飾ってある写真立てを取り、和夫に渡す。

写真には、湖のほとりで、京子・秀夫・よしこ、そして和夫が写っていた。

写真の下には（２０１６年５月　芦ノ湖）

京子「これがその理由よ」

和夫「この男の人、私にそっくりですけど」

京子「そりゃあそうよ。

あなただもの。

山本和夫その人だもの。

それともあなた、なにもかも忘れてしまったの？　」

和夫「こんなはずがないんです。
私には横浜に妻子がいます。
この人は別人です」
途端に京子の表情が変わる。
ゴホンゴホンとせき込みながら、
京子「そう、そうだったのね。
本の取材とか言って6か月も家を空けていたのは、そのせいね。
あなた、それは重婚よ。
立派な犯罪だわ」
というなり、コップのビールを一気に飲み干し、立ち上がる。
和夫「ちょっと待ってください。
それは違いますよ」
隣の夫婦の寝室の襖を開け、バタンと閉める。
和夫「すみません。
なにか誤解があるようです。
いずれにしても明日朝一番で失礼します。
今晩だけ泊めてください。

本当にごめんなさい」

和夫、立ち上がり、ウロウロと歩き回る。

その内テーブルを見やって、残りのビールを飲み、食器を台所へ運ぶ。

○同・台所（夜）

気を静めるように、食器を洗って、水切りかごに立てかける。

ゴミの分別袋を見つけ、ゴミを分けて入れる。

勝手に体は動いているが、心そこにあらず。

電気を消して居間へ向かう。

○同・居間（夜）

和夫、扇風機を止め電気を消す。

バッグとレジ袋を持って、かっては父の書斎だった隣の部屋へ。

○同・書斎（夜）

照明を点ける和夫。
机の傍には一人用のベッド。
その上に小さな縦長のポスター
（本年度さざなみ賞特選『時の狭間で』
著者・山本和夫）
横の本棚に３冊並んだその本を見つけ、
手に取ってみると見開きに著者の写真。
まるで和夫瓜二つ。
和夫「一体どうなってるんだ」
９月とはいえまだ暑い。
窓を網戸だけにして、かたわらの扇風
機を動かす。
上着を脱ぎ、ネクタイを取り、Ｙシャ
ツ、ズボン、靴下を脱ぐ。
それらをきれいに折りたたむ。
半袖シャツとステテコ姿で椅子に座り
込み、机にレジ袋を。
中からウィスキーとポテトチップスを
取り出し、棚のショットグラスに酒を。
チップスを摘まみながら、酒を煽る。

首を捻りながら、さっきの会話を思い
出し、思案にくれる。
京子の声「あなた、それは重婚よ。
立派な犯罪だわ」
そしてもう一杯。さらにもう一杯。
和夫、眠くなって、ベッドで
寝入ってしまう。

○同・書斎（朝）
秀夫があわてて入ってくる。
秀夫「お父さん、お父さん！　」
和夫「ムッ（と起き上がり）、なに、どうした」
秀夫「お母さんが」
和夫「お母さんがどうした」
秀夫「起きないんだ。
いくら呼んでも」
和夫「えっ？　」
和夫、ベッドを離れる。
ズボンを穿き、Ｙシャツを着る。

○同・夫婦の寝室（朝）

戸を開けて、和夫と秀夫入ってくる。

ふとんに寝ている京子。

その横で座って、母の顔をじっと見ているよしこ。

京子の顔が赤い。

和夫、膝をついて、京子の額に手を伸ばす。

京子、目を開き、その手を払いのける。

和夫「ちょっとごめんなさい。

子供たちが心配しているから」

京子の手を押さえて額に手を当てる。

和夫「こりゃあひどい。

（秀夫に向かって）体温計どこにあるかわかる？　」

秀夫「うん」

和夫「取って来て」

すぐ出てゆく秀夫。

後を付いてゆくよしこ。

和夫「苦しいですか？　」

京子「・・・」
和夫「起きてすぐ出てゆくつもりでしたが、
この状態であなた方を放っておけません。
お嫌でしょうけど、我慢してください。
悪いようにはしませんから」
秀夫とよしこ入って来て体温計を渡す。
和夫、旧式の体温計であることを確か
め、2、3度振って京子の手に握らせる。
和夫「脇にはさんでください」
京子、体温計を脇に挟む。
和夫、腕時計を見て、
和夫「6時35分、5分として40分まで。
（子供たちを振り返り）君たち、着替えて
学校へゆく支度をして。
おじさん、すぐ朝ごはんの支度をするから」
秀夫「うん」
と、よしこの手を取って部屋を出る。
和夫「いいお子さんたちですね」
居心地悪そうに、時計を見つめる。
しばらく沈黙が続く。

和夫「ＯＫ、体温計を見せてください」
京子、体温計を和夫に渡す。
和夫「３８度５分、こりゃあ大変だ。
じっと寝ていてくださいね」
部屋を出て襖を閉める和夫。

○同・居間（朝）
和夫「コンビニでサンドイッチ買ってくるから
待っててね。
サンドイッチはなにがいい？
野菜サンド、卵サンド、カツサンド？　」
秀夫「ぼく、カツサンド」
よしこ「わたしも」
和夫「わかった」
部屋を出てゆく和夫。

○山本家外観（朝）
和夫、玄関脇の自転車を見つけて、
またがる。

○コンビニ店内（朝）
店員「いらっしゃいませ、お早うございます」
和夫、サンドイッチ４個と、１リットルの牛乳、栄養ドリンクを１本、熱中症対策用のペットボトル飲料５本をカゴに入れ、レジへ。
横の新聞を見つけ、それを１部。
店員「カードはお持ちですか」
和夫「いいや」
金を払って出てゆく和夫。
店員「ありがとうございました。またどうぞお越しくださいませ」

○山本家・居間（朝）
急いで入ってくる和夫。
和夫「二人とも手を洗って」
和夫、棚からコップを３個取る。
戻ってきた二人の前に、カツサンドとコップを。
和夫「（牛乳パックを開き）このぐらいかな」

と、注ぎ分ける。
和夫「おじさん、お母さんの様子くるからね。
ゆっくり食べていてね」
秀夫「うん、お母さん大丈夫？　」
和夫「もちろん大丈夫」

○寝室（朝）
和夫、レジ袋を下げて入ってくる。
和夫「子供たちはサンドイッチ食べてます
から心配なく」
突然、京子の目から涙が。
京子「すみません」
和夫「いやなに・・・。
ところで、あなたサンドイッチ食べられま
すか」
京子「いえ、なにも欲しくありません」
和夫「それは困ったな。
なにか食べないと」
京子「とてもだめです」
和夫「それじゃ、この栄養ドリンク１本だけ

飲んでください」
袋からドリンクを取り出し、キャップをねじって外す。
和夫「寝たままじゃ飲めませんね。起きられますか？　」
京子、身をよじって起き上がろうとする。つい、彼女の背に手を添える和夫。
その時、彼女の汗のにおいと体臭が立ちのぼり、ドギマギする和夫。
それと気づいた京子は、パジャマの衿を合わせる。
和夫、背中から手を離し、ドリンクを渡す。
少しずつ、それでも全部飲み干す京子。
和夫「じゃ、横になって下さい」
そして袋から冷えたペットボトルを４本取り出し、京子の両首筋と脇の下に挟む。
和夫「ちょっとゾクッとするかもしれないけど、これは効くんですよ。

これで少しは楽になるでしょう。
子供たちが学校へ行ったら、病院へ行きましょう」
京子「このまま寝ていれば治りますから」
和夫「だめだめ。
何が起こるか分からないし。
時間になったら呼びに来ますから」
小さく頷く京子。
部屋を出て襖を閉める和夫。

○同・居間（朝）
和夫「美味しかった？　」
よしこ「うん、とても美味しかった」
和夫「兄ちゃんは、学校へお茶持っていくんだろ？
まだ暑いからね」
秀夫「うん」
よしこ「わたしは先生に言ったらくれるよ」
和夫「そう。
兄ちゃん、このドリンク持っていきなさい。

水筒持ってきて」
秀夫、台所から水筒を持ってくる。
和夫、ペットボトルのフタを取り、秀夫に渡す。
秀夫、水筒にそれを注ぎ込む。
和夫「二人ともトイレ行った？　」
秀夫「うん」
和夫「じゃあ、歯を磨いてきなさい」
和夫、サンドイッチを食べ始める。

二人が洗面所から帰ってくる。
和夫「今日はね、おじさん仕事に行かずに家に居るから、安心して帰ってきなさい」
よしこ「お父さん、なんで自分のことを、おじさんって言うの？　」
和夫「えーっと、それはね・・・。
あの、この頃父さん疲れていて、自分でもおかしいと思ってるんだ。
そのうち治るよ」
サンドイッチを食べ終える和夫。

玄関が開く音が聞こえて、
橋本君（秀夫の同級生（８）の声「山本君、
学校行こう」
秀夫「はーい。
行ってきます
お母さん、行ってきます」
和夫「いってらっしゃい」
襖の奥で京子の小さな声。
秀夫ランドセルと水筒を持って出てゆく。
和夫「（よしこに）君は幼稚園？
それとも保育所？　」
よしこ「保育所」
和夫「そう、それと君の名前は？　」
よしこ「よしこよ。
それも忘れたの？　」
和夫「うん、ごめんね。
じゃあ一緒に行こうか」
よしこ「うん」
よしこ、通園バッグを肩にかけ、帽子
をかぶり、寝室に声をかける。

よしこ「お母さん、行ってくるね」
和夫「送ってきます」

○保育所・玄関（朝）
入口に机があり、何人かの子供が
出欠ノートに判を押している。
よしこも、判を取り上げ、今日の欄に
うさぎの印を押す。
鈴木先生（２８）「よしこちゃん、おはよう」
よしこ「おはようございます」
鈴木先生「あら、よしこちゃんのお父さん
ですか。
お会いするの初めてですね。
担任の鈴木です」
和夫「あ、いつもお世話になっています」
鈴木先生「よしこちゃんはいつも私の手伝い
をしてくれるんですよ」
和夫「はあ、そりゃあどうも」
と、トンチンカンな返事。
和夫「えーっと、何時ごろ迎えに来ればいい

ですか？」

鈴木先生「４時ごろまでにお願いします」

和夫「はい、じゃあ」

和夫、よしこに手を振って足早に外へ。

○山本家実家・外観（朝）

庭の奥に１台の軽自動車を見つけ、近寄る。

けっこう年代物。

タイヤを点検し、なんとか走りそうなことを確認し、玄関で、鍵を使って戸を開く。

○同・洗面所（朝）

バッグから歯ブラシを取り出し磨く。

顔を洗って、持ってきた電気シェーバーで顔を当たる。

タオルで顔を拭って部屋を出る・

○同・台所（朝）

和夫、冷蔵庫を開ける。
調味料以外、何もない。
和夫「（小さな声で）これはひどいな」
米櫃（こめびつ）らしい容器を開くが、底に数粒の
米があるだけ。
和夫「まいったなあ」
時計を見る和夫。
８時１０分。
そのまま寝室へ。

○夫婦の寝室（朝）
襖を開いて声をかける。
和夫「どうですか、加減は」
京子「ええ」
と言った途端に咳にむせる。
和夫「やっぱり病院へ行きましょう。
着替えできますか？
状態が状態だから、パジャマのままでも
いいんですよ」
京子「いいえ、着替えます」

和夫「じゃあ」
と、襖を閉める。

○同・居間（朝）
ブラウスとスカート姿で京子出てくる。
和夫「保険証と車の鍵を貸してください。
ああ、それから、失礼なようですがお金の
心配はいりませんから」
京子、抗う気力もない様で、戸棚から
保険証を取り出し、渡す。
京子「鍵は玄関に吊っています」
和夫「分かりました。
じゃ、行きましょう」
和夫、ショルダーバッグを取り上げる。

○同・玄関（朝）
和夫、吊ってある車の鍵を見つける。
靴箱を開き、平底靴を取り出す。
和夫「これでいいですか？　」
京子、うなずく。

和夫、京子の片腕を支えて、靴を履かせる。
二人、玄関を出る。

○同・玄関の外（朝）
和夫「この家の鍵、横浜へ出てからも持ってるんです」
そう言いながら鍵をかける。

○同・裏庭（朝）
和夫、車の助手席側のドアを開ける。
京子を座席に座らせる。
シートベルトを締め、シートを傾ける。
和夫、運転席に座り、エンジンを掛ける。
最初、ウォンウォンと点火しない。
２度、３度、４度。
それでも、一呼吸おいて再度エンジンを掛け、動き出す。
和夫「ちょっと肝が冷えました。
動いて良かった」

車は本通りへ。

○車の中（朝）

和夫「病院は岩隈さんでいいですか？
あそこは内科があったはずだから」

京子うなずくとともに咳をする。

車は、住宅と田畑の間を縫いながら前へ。

和夫「あなた、ご両親は？　」

京子「亡くなりました」

和夫「ご兄弟は？　」

京子「私は一人っ子です」

和夫「まるで職務質問みたいですみません。
誰か連絡しておかないといけない人がいる
かと思いまして」

京子「誰も居ません」

和夫「そうですか。
ご主人の連絡先は分かりますか？
携帯電話の番号なんか」

京子「ほんとにあなたは私の和夫さんと違う
んですか？

あの人は決して連絡を入れない人なんです。
それに私も経済的に苦しくて、電話も携帯
も手放してしまいました」
しばらくすると（岩隈医院）の看板が。

○岩隈医院・駐車場
和夫「ちょっと待っててください。
車椅子を借りてきますから」
そう言って駆けだして行く。
しばらくして車椅子を押して戻ってくる。
京子を介助しながら車椅子へ。

○岩隈医院・受付
何人かの患者が座って待っている。
和夫「（保険証を出しながら）すみません。
家内が熱を出しまして」
受付嬢、問診票と体温計を渡して
受付嬢（２４）「これに記入してください。
その間に体温も計って下さい」
和夫「（京子に向かって）自分で書けますか」

京子小さく頷く。
その間も咳がぶり返す。
和夫、車椅子を後ろに移し、自分は
そばの席に座る。

書きあがった問診票と体温計を受付へ。
受付嬢が体温の高さに驚き、後ろの看
護師宮崎（４８）と小声で話してから
受付嬢「山本京子さん、診察室１番へ」

○同・診察室１番前
診察室１番から宮崎が出てきて
宮崎「山本さん、お小水取れますか」
和夫「（京子に）大丈夫？」
京子うなずく。
宮崎、車椅子を押して検尿室へ。
しばらくして出てくる京子と看護師。
宮崎「ご主人ですか？」
和夫「・・・はい」
宮崎「一緒に診察室へどうぞ」

○診察室

和夫「よろしくお願いします」

岩隈医師（５９）「お熱が高いようですけど、どうされました？　」

和夫「今朝起きると熱が出て」

岩隈「昨日の夜はどうでしたか？　」

京子「ちょっと暑いと思いましたが、季節のせいだと思ってました」

岩隈「そのとき熱は計らなかったんですね」

京子「はい」

岩隈「痰は出ていますか？　」

京子「いいえ」

岩隈「咳だけですか？　」

京子「はい」

岩隈「ちょっと失礼」

彼女の胸に、服の上から聴診器を。

岩隈「ちょっと咳をしてみてください」

さらに彼女の椅子を回転させて背中に聴診器。

岩隈「そこのベッドに仰向けに寝てください」
看護師が手助けして京子、横になる。
岩隈、胸から腹部を軽く押してゆく。
岩隈「傷みは無いですか？　」
京子「はい」
岩隈「ふむ。
今からレントゲン検査と血液検査、それと
鼻粘膜の組織を取ります」
宮崎「じゃあ、車椅子へ」
宮崎、車椅子を押して診察室から出る

○レントゲン検査室前
宮崎「御主人はここでお待ちください」
京子の車椅子は中へ。
和夫は所在なく壁のポスターを見やる。
急に立ち上がり、病院の外へ。

○病院・駐車場
携帯を取り出し、電話番号リストの清雅
堂をタッチ。

電話の声「この電話番号は使われておりません
お確かめの上、お掛け直しください」
和夫「おかしいなあ。
家の登録番号だから、間違うはずないのに」
もう一度リダイヤルするが同じ。
和夫「困ったなあ」
しばらく思案する和夫。
そして病院内へ。

○同・受付前
自動販売機で缶コーヒーを買い、飲み始める。
そしてレントゲン検査室前へ。
心配そうにウロウロ歩き回る。
その内、京子が出てくる。
すぐに、隣の処置室へ。

○処置室
京子、血液を採られる。
さらに鼻孔に綿棒を差し込まれ、組織

採取をされて、体重を計測。
終わると京子の車椅子が出てくる。
宮崎「先生のお話がありまから、診察室へ」
○診察室
机の上のモニターには、胸のレントゲン画像が。
岩隈「えーっと、ここととここに薄いですが、炎症の影があります。
初期のインフルエンザですが、経過次第では肺炎に移行します。
それより心配なのが、栄養失調です。
無理なダイエットされてませんか？」
京子「いいえ」
岩隈「検査するまでもなく、体の状態が悪いです。
体重も、あなたの年齢の平均体重より１２キロも少ないです。
入院をお勧めします。
体を整えないと、治療も効果が薄いから。

いいですか？」
和夫「はい、お願いします」
京子、和夫の顔を見て、戸惑う表情。
和夫「心配しなくていいから。
子供たちは任せて」
岩隈「あ、それから、一緒に住んでおられる
のは？」
和夫「私と子供です」
岩隈「あなたたちに、発熱や咳は？」
和夫「いいえ、ありません」
岩隈「そう、それはよかった。
じゃ、さっそく病室へ、宮崎君」
宮崎「はい」
宮崎、車椅子を押して部屋の外へ。
和夫、岩隈に一礼して続く。

○診察室の外
宮崎、２枚の書類を渡す。
宮崎「この入院申込書に記入してください。
それから、ここに書かれているものを揃え

てください。
売店は、奥の右側にあります。
病室は２階の２０２号室です」
そう伝えて、車椅子を押して、エレベーターのほうへ。
和夫、売店に向かう。

○２０２号室
和夫、レジ袋を下げて入ってくる。
京子の点滴が始まっている。
宮崎に入院申込書とレジ袋を渡す。
宮崎、書類をチェックし、買ってきたものを点検。
宮崎「結構です。
当分のあいだ個室になります。
それから、今日から５日間は面会できませんからね。
インフルエンザは感染力が強いですから」
和夫「はい」
京子「あなた・・・」

和夫「なにも心配はいらないから、安静にして。
あ、看護師さん、差し入れはいいんですか」
宮崎「普通は病院食で十分なんですが、この
方は、それ以外に少し摂ったほうがいいで
すから、本人の食べたいものなら・・・。
持ってきたものを、その都度見せてください」
和夫「わかりました。
よろしくお願いします。
（京子に向かって）じゃあね」
手を振って部屋を出る。
京子も力なく手を振る。

○病院駐車場
和夫、車を発進させる。

○帰る道沿いのスーパー駐車場
和夫が、カートに段ボール３杯の買い
物を運んで来る。
それを車に乗せる。
そして、帰路に就く。

○山本家・台所

和夫、買ってきた食材を冷蔵庫へ。
乾物を棚の中へ。
米を袋のまま米櫃へ入れ、封を切って
３合の米を炊飯器の釜へ。
米を研ぎ、水を足し、午後６時に
タイマーをセット。

○同・夫婦の寝室

和夫、窓を開け放ち、網戸だけに。

○同・裏庭

和夫、京子と子供たちの布団を
物干し竿に掛け、竿の端に吊ってあっ
た竹竿で布団をはたく。

○同・風呂場

洗濯機には、すでに子供たちが衣服を
入れている。

京子の寝室から取ってきた彼女のパジャマや衣類、ふとんのシーツも入れる。
和夫、服を脱ぎ、裸になって下着とYシャツ、靴下を入れる。
自分のバッグから下着とステテコを取り出して穿く。
洗濯機に水を満たし、あたりを見回す
和夫「洗剤も無かったか」
和夫、そのまま洗濯スイッチを入れる。

○同・居間
和夫、窓を開け、網戸にする。
扇風機を回す。
スーパーで買ってきた幕の内弁当を食べ始める。
ふと気が付いて、朝買ってきた新聞を広げる。
風呂場から、洗濯終了のブザー。
和夫「あ、いかん、いかん」
立ち上がり、風呂場へ。

○裏庭

裏の戸を開けて洗濯籠を手に出てくる。
和夫、洗濯物を干してゆく。
裏庭は南向きでよく陽が当たっている。
さっき乗って帰った車に目が留まり、
その下に黒いシミが。

○森本モータース

山本家の斜め前の古い自動車ガレージ。
和夫「すみませーん」
声をかけると、奥で食事をしていた夫
婦の内、老人がやってくる。
森本（ガレージの店主（６７）「なんだべか。
あ、おめえは山本さんンちの息子でねえか」
和夫「はい、ご無沙汰しています」
森本「こんな近場（ちかば）で、ご無沙汰もねえもんだ。
今日は、何の用だや」
和夫「あの、車がオイル漏れしてまして」
森本「おめえ、その車さ、運転したか」

和夫「・・・いえ」
森本「そらよかった。
火が出ると、ひでーめに会うからに。
どれ、どこにあるだ」
和夫「家の庭です」
森本「どれ、ちょっと車からかって見よ」
こうして二人で歩き出す。

○山本家の裏庭
山本、和夫から鍵を借り、エンジンを
かける。
やはりウィンウィンと掛かりづらい。
森本「バッテリーが、ちっとんべ、へたってる
がや」
森本、ハンドルをいじる。
森本「硬てーな」
降りて、フロントバンパーを開ける。
森本「こりゃひでーな」
地面を見てみる。
地面には転々と油漏れが。

森本「古ふりー車だから、オイルむるんだべ。
どうだ、新車にしたほうがよかっぺ」
和夫「そんなに悪いんですか」
森本「１５年も前の車だに、直すより買った
ほうがの」
和夫「あの、考えてみます。
とりあえず悪いところだけ修理を」
森本「そうさな、じゃ車預かって帰るだに」
そういって車を運転して道路に出る。

○山本家居間
和夫「あら、飯がまだだった」
そう言って弁当の残りをかき込む。
ペットボトルに残ったお茶を飲む。

○同・台所
和夫、弁当箱のプラとペットボトルを
分別。
食器棚を捜し、ガラスの長く四角い
容器を捜し出す。

そこへ買ってきた水出し麦茶を入れ
水道水を入れ、かき混ぜて、冷蔵庫へ。

○同・居間

和夫、朝、京子が保険証を取り出した
箪笥の引き出しを開け、中を調べる。
京子名義の預金通帳は残額１３５０円。
生命保険の解約通知が１通。
健康保険の保険料納付通知書が１通。

和夫「健康保険だけは払ってたんだな」

ほか、諸々の督促状。
その督促状の束を手に、座り込む。

和夫、督促状を一枚ずつめくりながら
携帯の電卓で集計。
ショルダーバッグを開け、札束を取り
出す。
並べた五百万円の札束を見ながら

和夫M「合わせて５０万足らずの支払い。
あの子たちは、俺にそっくりな人間の子

だから、ほっとくわけには・・・」

玄関の戸が開く音。

秀夫「ただいま」

和夫「え、そんな時間か」

和夫、札束をバッグにしまう。

秀夫、部屋に入ってくる。

秀夫「なんか食べるものない？　」

和夫「台所のテーブルにアンパンがあるから。

一つだけだよ。

冷蔵庫に麦茶が入ってるから」

秀夫「うん」

秀夫、駆けて行って、アンパンと麦茶の

コップを持ってくる。

秀夫「お母さんは？　」

和夫「入院した。

火曜日までは会えない」

秀夫「どうして」

和夫「君たちに病気が移ったら困るから」

秀夫「ふーん」

和夫「宿題は？　」

秀夫「ある」
和夫「じゃ、やってしまいなさい」
秀夫「うん」
柱時計を見る和夫。
和夫「３時か」
立ち上がり、書斎へ。

○書斎
机の上のノートパソコンを見つける。
電源を入れ、しばらく待つ。
デスクトップが表示される。
この家の主、山本和夫の所在を表す物は無い。
パソコンの蓋を閉じる。
棚の（時の狭間で）を取り出し読み始める。
つい引き込まれて、気づくともう４時あわてて居間へ。

○同・居間

宿題中の秀夫に、
和夫「よしこちゃんを迎えに行ってくるから。
誰が来ても、出ないでね」

○保育所玄関
自転車を立てかけ、中に進むと、
よしこ「お父さん、遅い！　」
和夫「悪い、悪い」
鈴木先生「ご苦労様です、
お母さんは、どうなさったんですか？　」
和夫「はあ、熱を出しまして」
鈴木先生「まあ、それは・・・・」
和夫「じゃあ、これで。
さあ、帰ろう」
鈴木先生「どうぞお大事に」
和夫「はい」
自転車を押して並んで帰る二人。
よしこ「お母さんは？　」
和夫「熱が引かないんで入院したんだ」
よしこ「大丈夫？　」

和夫「大丈夫だよ」

○森本モータース前

和夫、よしこの手を引いて中へ。

和夫「すみません」

奥から森本出てくる。

森本「あら、むじっけー子だなん。

あんたの子か？　」

和夫「はい。

あのー、車どうですか？　」

森本「一応直したけんどね」

と、領収書と明細書を渡す。

和夫、金を払う。

和夫「お世話になりました。

後で取りに来ます」

森本「うん、あんがとね」

森本、よしこにバイバイと手を振る。

よしこも振り返す。

○山本家・居間

和夫とよしこ入ってくる。

和夫「ただいま」

秀夫「お帰り。

よしこ、あんぱんあるよ」

和夫「兄ちゃん、やさしいなぁ」

よしこ「どこに、どこに」

秀夫「台所」

よしこ、飛んで行き、あんぱんを手に帰ってくる。

よしこ「お父さん、食べていい？」

和夫「ええっと、もう4時半だからね。

半分食べて、あとは晩御飯の後で」

よしこ「うん」

よしこ、封を切ってパンを半分に割り残ったのを食べ始める。

○同・裏庭

和夫出てきて、布団をもう一度はたき家の中へ。

続いて、洗濯物を取り込む。

○同・夫婦の寝室

和夫、掃除機をかけ、終わると布団を敷き広げ、シーツを掛ける。

和夫「君たち、お母さんと寝てたの？　」

秀夫「うん」

和夫、子供の布団も２セット敷く。

和夫「暑いなあ！　」

と、部屋にエアコンがあるのを見つける。

リモコンを取って冷房２５度で運転。窓を閉める。

和夫「君たち、エアコンあるのを教えてよ」

秀夫「エアコンやテレビは点けちゃいけないんだよ。

電気代かかるから」

和夫「そうか・・そうか。

今日からはいいからね」

よしこ「よかった。

ドラエモン見られる！　」

和夫「さあ、晩御飯の用意だ」
と、そのとき、呼び鈴が鳴る。
玄関に駆け付ける和夫。

○同・玄関（夕方）
中村寿美子（４８・和夫の姉）
「ちょっと、京子さん！」
ガラっと戸を開く和夫。
寿美子「あら、和ちゃん！」
和夫「あ、お姉ちゃん」
寿美子「お姉ちゃんじゃないわよ。
やっと帰ってきたのね。
あんた、どんだけ京子さんが苦労していたか
知ってるの？
うちの弁当屋で働いてもらっているけど、
６月あたりから、体の調子が悪くなって、
休みがち。
日に日に痩せていくから心配してたのよ。
あんた、どこへ行ってたのよ。
きれいな奥さんとかわいい子供を残して。

あきれてものが言えないわ」
和夫「あの、・・・どうもすみません」
寿美子「謝るんだったら京子さんに謝んなさい。
それで、京子さんは？　」
和夫「あの・・・あの今日入院してしまって」
寿美子「何ですって！
なんてこと！
自分の弟ながら、愛想が尽きるわ、あんた。
それでどうなのよ、症状は」
和夫「インフルエンザですけど、それより重
い肺炎を防ぐため入院です」
寿美子「ああっあああっ。
明日にでも見舞いに行かなくっちゃ。
どこに入院したのよ」
和夫「あの・・・岩隈さんですけど」
寿美子「なによ」
和夫「火曜日まで面会謝絶です」
寿美子「・・・・」
和夫「すみません」
寿美子「もういい、帰る」

と言って戸を開き表へ。
ガシャっと戸を閉める。
和夫M「参ったな。
なんで私が謝らないといけないんだ」
とたんに戸が開き、寿美子がレジ袋を
突き出す。
寿美子「うちの弁当の残り！　」
和夫「あっ」
和夫に袋を渡し、再びガシャっと戸を締
める。

○同・居間（夕方）
子供たちはテレビのアニメを見ている。
和夫、弁当の袋をテーブルに置き、
和夫「うちの風呂は、まだ薪を燃やしてる？　」
秀夫「うん」
和夫「父さん、風呂を沸かしてくるから」

○同・風呂場（夕方）
和夫、蛇口を捻って水を出す。

しばらくして五右衛門風呂の水が八割
程入ったとき、蛇口を締める。

○同・外の風呂の焚口（夕方）
そばにあった紙くずを丸めて炉に入れ
さらに柴をその上に。
マッチで火を点け、さらに薪を突っ込む。
しばらくして火が燃え上がる。
和夫、そばの小さな椅子を引き寄せ、
その上に座り、チロチロ燃え上がる炎
をじっと見つめる。
ポケットから携帯を取り出し、横浜へ
掛ける。
電話の声「この番号は使われておりません・・・」
和夫「やっぱりなあ」
１５分ほど経って、炉に蓋をして、立
ち上がる

○同・風呂場（夕方）
和夫、湯を掻きまわして温度を見る。

脇にあった底板を風呂に沈める。
棚の子供たちの肌着とパジャマを
椅子に並べる。

○同・台所（夕方）
電子レンジに、もらった3個の弁当を
全部入れ、ダイヤルを回して温める。
ちょうど炊飯が終わった音。
炊飯器のスイッチを切る。
和夫「このごはんは明日だな」
コップ3つに麦茶を注ぎ、盆に載せ
弁当とともに居間へ運ぶ。

○同・居間（夕方）
和夫「さあ、ご飯にしよう」
弁当と箸と麦茶のコップを並べる。
よしこ「わあ、おいしそう。
おばさんが呉れたの？　」
和夫「そうだよ。
おばさん時々弁当持ってきてくれるの？　」

秀夫「うん、１週間に３回ほど」
よしこ「おばさんちの弁当美味しいんだよ。
肉も入ってるし」
和夫「そう。
おばさん、優しいね」
秀夫「うん、優しい」
和夫、テレビを止めて、食事を始める。
和夫「美味しいね」
よしこ「うん、美味しい。
こないだなんか、美味しくて、お母さん泣いたよ」
和夫「そう、そうだよね。
うれし泣きだね」
と言いながら、自分も涙がにじむのをかろうじて堪える。
和夫M「お姉ちゃん、ありがとう」
食事を終える３人。
和夫「では、食後のデザートにアイスクリーム」
秀夫「え、ほんとに？」
和夫、台所から小さいカップアイスと

スプーンを持ってくる。
和夫「はい、どうぞ」
よしこ「お父さん、食べないの？」
和夫「うん、父さんはウィスキー」
と、すでに用意の水割りを。
そして、分厚いノートを取り出し、
日記をつけ始める。

よしこ「ああ、美味しかった」
和夫「二人とも、お風呂に入りなさい。
もう湧いてるから」

○同・風呂場（夜）
風呂の蓋を取り、かき混ぜる和夫。
和夫「ちょっと熱いな。
熾火（おきび）のせいか」
蛇口をひねり、水を足す。
子供たち二人が入ってくる。
和夫「はい、どうぞ」
出てゆく和夫。

○同・居間（夜）
戻って来て、日記の続き。
風呂場から、子供たちの声が聞こえる。
和夫「あ、そうだ」

○同・風呂場（夜）
和夫ステテコと半袖シャツで
入ってくる。
和夫「髪を洗わなきゃ。
よしこちゃん、出てきなさい」
出てきたよしこを風呂の腰掛に座らせ、
向こうを向かせる。
和夫「手で耳を押さえて、目をつぶってるん
だよ。
髪を洗うから」
そう言って、よしこの髪に石鹸を付けて
やさしく洗う。
さらにお湯で石鹸を洗い流す。
和夫「よし、済んだ。

体は自分で洗うんだよ。
次は兄ちゃんだ」
秀夫「うん」
和夫、出てきた秀夫の髪も洗ってやる。
和夫「よし、君も体洗えよ。
じゃあね。
歯を磨いてくるんだよ」
出てゆく和夫。

○同・居間（夜）
和夫、首をひねりながら日記に没頭。
しばらくして子供たちがパジャマ姿で
入ってくる。
和夫「さあ、お布団に入って寝なさい」
和夫、立ち上がり、子供たちと寝室へ。

○同・夫婦の寝室（夜）
和夫、エアコンの風向き、風力を調節。
温度を２８度に設定。

和夫「タオルケット、はぐるんじゃないよ。
おやすみ」
よしこ「おやすみ」
秀夫「おやすみ」
電灯を消し、部屋を出て襖を締める和夫。

○同・風呂場（夜）
風呂に浸かる秀夫。
顔をこすって、頬を叩く。
和夫「あああ、どうなってしまうんだろ」

○同・居間（夜）
台所から氷を入れたコップを持ってきて
ウィスキーを注ぐ。
座って飲み始める。
和夫M「さあ・・・これから・・・・」
しばらくして、よしこと秀夫が、枕を
抱えて出てくる。
よしこ「お父さん、お母さん居ないから
一緒に寝よう？」

和夫「えっ、ああそう。
よし、一緒に寝よう」
ウィスキーを飲み干して、寝室へ。

○同・夫婦の寝室（夜）
寝室の襖を締める和夫。
両側に子供たちのふとん。
子供たちのタオルケットをちゃんと
掛け電気を消す。
自分も横になる。
あっという間に寝入る和夫。

○同・寝室（朝）
和夫、目を覚ます。
二人の子供が和夫の布団に入って
寄り添って寝ている。
苦笑する和夫。
時計を見て、慌てる和夫。
和夫「うわっ、7時だ。
学校に遅れるぞ！」

二人の子供を揺すって起こそうとする。
秀夫「えー、なに？　」
和夫「学校！　」
秀夫「お父さん、今日は土曜だよ。
学校はお休み」
和夫「え？　、そう？　」
秀夫「そうだよ」
和夫「そうか、そうなんだ。
じゃ、もう少し寝よう」
そういってタオルケットを被る。

○同・居間（朝）
3人が朝食を摂っている。
目玉焼きに、ソーセージ2本、ほうれん草のゴマ和えと、インスタントの味噌汁に、昨日の夜炊いたごはん。
和夫「ごはんまだあるから」
秀夫「半分だけよそってくる」
と、台所へ。
よしこ「わたしも」

和夫「レンジでチンするんだよ。
ごはん冷たいから」
二人は湯気の立つご飯を持ってきて、
みそ汁の中へ入れる。
和夫「ネコまんまか。
父さんも小さいころよく食べたなあ」
と、彼もみそ汁にご飯を。

和夫「さあ、今日は母さんのスマートフォンを
買いに行こう」
よしこ「なんで？　」
和夫「火曜日まで母さんに合えないだろ。
スマートフォンならいつでもビデオ通話で
お母さんの顔を見ながら話ができるんだよ」
よしこ「いいな」
秀夫「僕にも買ってよ」
和夫「まだ君には早いよ。
大きくなったらね」

○携帯ショップ・外観

和夫と二人の子供が出てくる。
和夫、子供たちを後部座席に座らせて
シートベルトを付けさせる。
和夫、運転席に座り、車を発進。
秀夫「お父さん、次はどこ行くの？　」
和夫「お母さんの病院。
まだ会えないけど、携帯を渡しに」
よしこ「会いたいな」
和夫「今日は我慢しなさい」
車は、病院への道をひたすら進む。

○岩隈病院・駐車場
和夫、子供を下ろして、自分も含め、
マスクを付けさせる。
院内へ。

○岩隈病院２階・ナース・ステーション
和夫、看護師に声をかける。
和夫「山本京子のことでお願いがあります」
奥で事務を執っていた宮崎看護師が

気づいて、やってくる。
宮崎「あの、面会はできませんけど」
和夫「いえ、そうじゃなくって、届け物を」
宮崎「ああ、あれね」
和夫、紙袋を渡す。
宮崎、中を覗き込んで、
宮崎「野菜ジュースと、これは・・もなか。
いいでしょう。
えーっと、これは？　」
和夫「携帯電話と充電器と説明書です。
病院内では使えませんか？　」
宮崎「いいえ、個室なら使えます」
和夫「子供たちが会いたいと言ってますので、
ビデオ通話でもと・・・。
恐縮ですが、買ったばかりなので、部屋で
充電をお願いしたいのですが」
宮崎「分かりました。
やっておきます。
（子供たちを見て）お母さんのこと心配ね」
二人の子供うなずく。

宮崎「心配しないで待っててね」
和夫「どうですか、容態は」
宮崎「まだ熱があります。
少し我慢が要りますね」
和夫「食事は摂れていますか？　」
宮崎「完食とまではいきませんけど」
和夫「分かりました。
じゃ、よろしくお願いします」
和夫、頭を下げて子供の手を取り、
立ち去る。

○車の中
和夫、道沿いのラーメン屋を見つける。
和夫「ラーメン食べるかい？　」
よしこ「食べる！　」
秀夫「ぼくも！　」
和夫「もうお昼だもんな」
秀夫、ラーメン店へ車を乗り入れる。

○ラーメン店内

３人、テーブルに着く。
秀夫「わあ、涼しい！」
和夫「冷房効いてるな。
さて、なにラーメンにする？」
よしこ「わかんない」
和夫「そうか、よし。
チャーシュー麺とミソラーメン２つお願い」
店主「あいよ！」
程なくラーメンが運ばれてくる。
和夫「熱いから、ゆっくり食べるんだよ」
和夫、二人に箸を取ってやり、さらに
自分のチャーシューを二人のラーメンに
１枚づつ載せてやる。
３人、フウフウ言いながら食べる。

○山本家居間
和夫、寝室の冷房をかけて、二人に
和夫「昼寝したほうがいいけど、どう？」
よしこ「寝る」
和夫「兄ちゃんも寝なさい」

秀夫「うん」
二人にタオルケットを掛けてやり、
部屋を出て、襖を閉める。

○同・書斎
窓を開き網戸だけにする。
和夫、扇風機をＯＮに。
椅子に座り、昨日の小説を読み始める。

○同・居間（夕方）
和夫「さあ、今晩は何を食べたい？　」
よしこ「カレー」
秀夫「カレー」
和夫「ははあ、定番中の定番か。
よし、じゃ、準備しよう」
そのとき、和夫の携帯のＬＩＮＥ着信
音が鳴る。
携帯を手に、回線を開く。
画面に、寝間着姿の京子が。
和夫、スピーカーモードにして、

棚の本を数冊取り出し、それに立てかける。

京子「今日はわざわざすみません。
おまけに携帯まで」

和夫「いいんですよ。
ビデオ通話分かったんですね」

京子「ええ。
あなたの説明書きがありましたから」

よしこ「お母さん！　」

秀夫「お母さん！　」

京子「二人とも元気にしてた？　」

秀夫「うん」

よしこ「お昼、ラーメン食べに行ったよ」

京子「（咳き込みながら）そう、それは良かったね。
あなた、なにからなにまで、本当にありがとうございます」

和夫「いえ、それより体大事にして早く良くなるんですよ。
晩御飯の用意があるので、私はこれで。

子供たちと何時間でも話してあげてください。電話料金は掛からないから」

京子、ベッドの上で頭を下げる。

和夫、立って台所へ。

○同・台所（夕方）

和夫、解凍しておいた豚肉をザックリ刻み、鍋にオリーブオイルを敷いて炒める。

居間からは、はしゃいだ子供たちの声が。

玉ねぎ、にんじんと、レンジで火を通したジャガイモを切って入れる。

そして1カップの水を入れて、煮立ったら、弱火にして、ルーを入れ、5分。

火を止めて、レタスを細かく千切り、やはり千切りにしたハムを載せ、マヨネーズを細く垂れ回す。

それを3枚の皿のカレーライスの脇に。

秀夫が入ってくる。

秀夫「お母さんが話したいって」
和夫「分かった」

○同・居間（夕方）
よしこ「お母さん、ほら、カレーのにおい！」
京子「ほんとね。
おいしそうなにおいだわ」
秀夫「嘘だ。
電話でにおいまで分からないよ」
京子「バレた！」
和夫「元気そうですね、よかった」
京子「あれから熱が少し下がりました」
和夫「それはよかった。
体に障るといけないから今日はこのへんで。
何か食べたいものがあったら、言ってくだ
さい、持っていきますから」
京子「いいえ、今日のもなか、久しぶりに
食べて、おいしかったです」
和夫「ほら、君たち、お母さんにさよならを」
よしこ「さよなら」

秀夫「さよなら、また、明日」
京子「さよなら。
あの、和夫さん、今夜お話を・・・」
和夫「はい、じゃこちらから掛けます。
とりあえず、さようなら」
京子「はい」
ビデオ通話終了。
和夫「さあ、ご飯にしよう。
机の上の本をかたずけて」
和夫、台所から、３皿のスプーン付きの
カレーライスと、麦茶を持ってくる。
和夫「いただきます」
秀夫「いただきます」
よしこ「いただきます」
３人は黙々とスプーンを動かす。
食事が終わって、和夫、大きな梨を
持ってきて、皮をむき始める。
剥き終って、三等分して芯をえぐり、
子供たちにわたす。
和夫「今日は風呂無いから、顔を洗ってから

寝るんだよ。
それまでテレビ見ていいから」
さっそくテレビをつける子供たち。
今日の日記をつける和夫。

○夫婦の寝室（夜）
子供たちを布団に寝かせる和夫。
和夫「ちょっと病院のことでお母さんに電話してくるから、さきに寝ててね」
電気を消し、そっと襖を閉める和夫。

○同・書斎（夜）
携帯を取り出し、京子を呼び出す。
すぐ、京子が出る。
画面はビデオ通話モード。
和夫「済みませんが、モードを通話モードにしてもらえませんか？
あなたの顔を見ながら話すのは、なにか面映ゆい、気恥ずかしい気持ちが」
京子「ええ、わかりました」

画面は消え、通話モードに。
和夫「子供たちも布団に入ったし、そちらも
病院だから、小さい声で話しましょう」
京子「はい」
和夫「お話というのは・・・」
京子「夫の旅先のことなんですけど・・・。
なにか東海道を歩くとかどうとか・・・。
詳しいことは話さないひとで」
和夫「ああ、なるほど。
しかし、それだけでは・・・」
何秒間か途切れる会話。
和夫「あの、失礼ですが、あなたの旧姓は
小柴さんとおっしゃいませんでしたか？」
京子「ええ、小柴京子です。
なぜ知ってるんですか・？」
和夫「やっぱりそうでしたか。
最初お会いした時から、どっかで見たよう
なと思ってました」
京子「だからどうして・・・」
和夫「高校は身延高校」

京子「待ってください」
和夫「三年の担任は古文の井上先生。
あなたの席は前から2列目」
京子「なぜ知ってるんですか？
そんなことまで」
和夫「・・・私はあなたと同級生でした」
京子「じゃ、じゃあなたはやっぱり和夫さん、
私の夫の・・・」
和夫「いえ、ちがいます。
ちがうんです」
京子「おっしゃっていることが分かりません」
和夫「私が知っているのはそこまでです。
高校卒業後、私は東京へ。
あなたがどうなさったのかは知りませんで
した」
和夫M「知りたかった・・・
だってあなたは、私の初恋の人だったから」
そこで京子激しく咳き込む。
和夫「ああ、ごめんなさい。
今日はこの位にしましょう。

もう寝てください。
おやすみなさい」
京子「はい・・おやすみなさい」
電話を切る和夫。
和夫「飲まずにはいられないな」
机に置いてあったウィスキーを飲む和夫。

○同・夫婦の寝室（夜）
和夫、電気を付けずに入ってくる。
見ると、子供たちは、和夫のふとんに。
ほほえむ和夫。
秀夫の布団に横たわる和夫。
月明りで子供たちの顔が美しく照らされている。

T（月曜日）
○山梨中央銀行身延支店
和夫、年金納付書・市県民税納付書・
介護保険料納付書・自動車税納付書と
金を差し出す。

和夫「預金もお願いします」
と言って入金票と通帳と百万円を差し出す。
女子行員、にこやかに受け付ける。

T（火曜日）
○岩隈病院・第一診察室
京子と和夫が岩隈医師と向き合っている。
岩隈「最初の診断通り、インフルエンザだけでした。
肺炎を併発しなくてなによりでした。
一応薬も出しておきますから、無くなるまで、忘れずに毎日飲んでください」
和夫「分かりました。
ありがとうございました」
岩隈「くれぐれも、無理なダイエットは慎むようにしてください。
お大事に」
和夫「はい、失礼します」

○岩隈医院・駐車場

和夫、京子の肘に手を当てて、支える。
片方の手には、入院時の日用品の袋。
京子は入院時のブラウスとスカート。
二人は車に。
駐車場を出てゆく車。

○車の中

和夫、クーラーの温度を下げる。

京子「ダイエットですって。
お金が無くて食べられなかったとは、恥ずかしくて言えませんでした」

和夫「あなたもご苦労なさったんですね」

京子「体を壊さなければ、ギリギリ生活できたんですけど」

和夫「昨日の話ですけど、私は大学を出て、すぐ骨董にのめり込み、有名な骨董師に弟子入りして、そのままそこの娘さんと結婚して店を継ぎました。
１９歳の息子と１６歳の娘がいます。

今回、大阪の骨董オークションに出るため
新幹線に乗ったら、寝てしまって、
起きたら知らぬ間に鰍沢に」
京子「へんな話ですね」
和夫「ええ。
ところであなたは高校卒業後は？　」
京子「短大の商科を出たんですけど、父親の
認知症が激しくなって、母だけではどうに
もならなくなって、こっちに帰って介護
しました。
１０年間介護して、その間に二人とも死ん
でしまいました。
悲しんでばかりいられず、こちらのスーパ
ーに就職しました」
和夫「ああ、そうですか。
それで和夫さんと会ったのは」
京子「高校の同窓会でした。
和夫さんから付き合おうと言われてすぐに
結婚しました」
和夫「なるほど。

そのころ和夫さんはもう小説家だったんですか？」

京子「いいえ。

そのころは出版社で働いていました。

最初に出した本が賞を取り、それから小説家一本で。

東京のアパートも引き払いここへ帰ってきました」

和夫「お互い、まるで違う人生を・・・・」

京子「はい」

和夫「体を壊したのは・・」

京子「あの人が出てから2か月目。

スーパーもよく休むのでいたたまれず。

それでお姉さんが声をかけてくれて・・・・」

和夫「早く和夫さんが帰って来ればいいですね」

京子「・・・・はい」

車は山本家に着く。

○山本家・裏庭

車が止まり、二人が降りてくる。

○同・居間
和夫、夫婦の寝室を開き、エアコンを。
和夫、麦茶のコップを持ってくる。
京子、和夫に深々と頭を下げる。
京子「ほんとに今度のことでは、お世話になりました。
何と言っていいか分かりません」
和夫「いいんですよ、気にしなくても。
もう何回も礼を言わないでください。
それこそ、私の方からお礼が言いたいぐらいです。
骨董の仕事柄、小さい子供と接することは皆無で、あなたのお子さんたちと、この４日間、楽しい時間を過ごさせてさせていただきました」
京子「楽しい？　」
和夫「アルフレッド・ベスターというＳＦ作家に、（破壊された男）という作品があります。

その中である悪人がすべての記憶を消され
頭の中も子供に帰って、再教育される
刑罰を受けるシーンがあります。
真っ白な頭脳に、優しさの溢れる記憶が
日々刻まれてゆくというくだりで、私は
感動しました。
小さい子供と接するというのは、この再教
育なんだなと実感しました。
得難い経験でした」
京子「まあ」
と、その時、玄関の呼び鈴が。
和夫、立って玄関へ。

○同・玄関
もう、姉の寿美子が入っている。
寿美子「あんた、退院したならしたと、連絡
ちょうだいよ！
わざわざ岩隈まで行ったんだから。
ちょっと、あんた、早く入んなさいよ」
表にいた寿美子の夫、一郎（５０）入

ってくる。
一郎「やあ、和ちゃん」
和夫「ああ、お兄さん」
寿美子「それで京子さんは？　」
和夫「居間に」
寿美子「そう」
と、まるで我が家のようにズカズカと。

○同・居間
京子「お姉さん！　お兄さんまで」
寿美子「京子さん、あんた大丈夫？　」
京子「はい、お陰様で」
寿美子「やっぱり痩せてるわねえ。
しっかり食べないと。
だいたいこの弟がだらしないばっかりに
あんたに迷惑かけて、ごめんね。
ほら、和夫、ちゃんと謝りなさいよ」
和夫「あ、はい・・・ごめんなさい」
京子「いえ、この人は、ちゃんとしてくれてます」

寿美子「ちゃんとしてたら、病気になんか、
ならないわよ。
ガツンと言わなきゃ」
一郎「まあそのへんで」
和夫「姉ちゃん、昼ごはん食べてく？　」
寿美子「え？　もうそんな時間？
なに食べさせてくれるの？　」
和夫「三色そうめん」
寿美子「あら、いいわね。
毎日弁当ばかりじゃ飽きちゃうしね。
もらおうか」
和夫「具材はもうできてるから、あとはそう
めん茹でるだけ。
５分程待ってて」
京子「私もお手伝いを」
和夫「今日はじっとしててね」
和夫、立ち上がり台所へ。
寿美子「京子さん、まだ顔青白いわね。
できたら早く、うちの仕事手伝ってもらい
たいけれど」

京子「はい、明日からでも」
寿美子「だめよ、病み上がりで。
もう1週間様子を見て、それからにしましょう」
京子「お兄さん、お姉さん、いつもお弁当有難うございました。
ほんとに助かりました」
寿美子「いいのよ。
こういっちゃ失礼だけど、残り物は捨てる他ないもの。
食べてくれればありがたいわ」

そうしている内に和夫、盆にそうめんの皿を4枚載せて持ってくる。
そうめんには氷を散らし、その上にハムときゅうりと大葉の細切りを。
さらにその上に金糸たまごとショウガをすったもの。
もう1往復して、麺つゆの入ったガラスの椀と箸。

和夫「大したもんじゃないけど、どうぞ」
寿美子「あら、やるじゃない。
　　あんたいつ覚えたの」
和夫「こんなの、覚えるって程のもんじゃない。
　京子さん、食べられますか？　」
京子「ええ、おいしそう」
和夫「じゃ、食べましょう」

　　食事が終わってお茶を飲む４人。
寿美子「そろそろ帰ろうか。
　明日の仕込みもあるしね」
京子「今日はわざわざありがとうございました」
一郎「なに、早く元気になるんだよ」
京子「ええ」
寿美子「ああ、忘れてた、トンカツ」
　　と、袋に入ったトンカツをレジ袋から
　　出し、机の上に。

　　二人が帰ってホッと息をつく和夫。
和夫「お姉ちゃんは、いつもあの調子なんだ。

何を言われるかヒヤヒヤしましたよ。
だって、私はなにも悪いことしてないのに」
京子「そうですよね。
でも・・・、ほんとにほんとに、あなたは私
の和夫さんじゃないんですか？　」
和夫「うん、そうですね。
証拠をお見せしましょう」
と言って、傍らのショルダーバックから
運転免許証と古物商許可証を取り出し、
京子に渡す。
京子「まあ、本籍は横浜市・・・。
本当だったんですね」
和夫「それより、ちょっと横になったらいかが
ですか」
京子「ええ」
和夫「私は裏山で風呂の薪を集めてきます」
京子「お願いします」
と、少し疲れたような表情で頷く。

○同・居間

秀夫「ただいま」
玄関から声がして、バタバタと走る音。
秀夫「お母さんは？　」
和夫「寝てるよ、起こさないで」
その声より早く、襖をあけて中へ。
秀夫「お母さん！　」
京子「秀ちゃん」
秀夫「よかった、戻ってる！　」
京子「元気だった？　」
秀夫「うん」
座り込んで母の手を取る。
京子「あんたの手、熱いわね」
秀夫「だって。走って帰ってきたもん」
京子「じゃ、お母さんと昼寝する？　」
傍らのタオルで秀夫の汗を拭いてやる。
秀夫「うん」
京子のタオルケットに潜り込む秀夫。
襖を閉める和夫。
和夫「ちょっと早いけど、よしこちゃんを
迎えに行ってきます」

京子「はい、お願いします」

○帰り道

手をつないで帰るよしこと和夫。

○同・居間

和夫と一緒に入ってくるよしこ。

よしこ「お母さん！　」

やはり襖を開け、中に入ると閉める。

小さな話し声が聞こえる。

○同・台所（夕方）

和夫、炊飯器の蓋を開け、カットわかめをお粥に混ぜ、塩を入れ、保温スイッチを切る。

京子と子供２人が入って来る。

よしこ「今日のご飯は？　」

和夫「お粥と、とうふサラダと、おばさんの持ってきてくれたトンカツ。

なにか文句ある？　」

秀夫「ありません」
和夫「あるはずないよな、トンカツだもの」
京子「なにかお手伝いは？　」
和夫「キュウリを刻んでください。
　君たちも手伝う？　」
よしこ「うん」
和夫「じゃ、このレタスを４枚ばかり剥がし
　て、水でよく洗ってね」
秀夫「うん、うん」
　和夫、秀夫が洗ったレタスの水を切り
和夫「この籠にレタスを細かく千切って
　入れて」
よしこ「わたしは？　」
　和夫、すでに水切りしておいた豆腐を
　ガラスのボールに入れる。
和夫「手を洗ってから、この豆腐を
　グチャグチャにつぶして」
よしこ「こんなの簡単だもん」
　とつぶしにかかる。
よしこ「冷たくて気持ちいい」

和夫「京子さん、このハムも細切りにして下さい」
京子「あなた手際がいいですね」
和夫「私のあの人が料理サボッたときは、私が作ってたから。
さあ、準備はできた」
和夫、キュウリ、レタス、ハムを豆腐のボールに入れる。
和夫「京子さん、マヨネーズで和えて下さい。
さてメインディッシュのカツは・・・。
こりゃあ大きいなあ。
わらじカツだな。
２枚は明日の朝に残しましょう」
和男、残った２枚のカツを２センチ幅に切りそろえ、電子レンジへ。
京子、中皿４枚にサラダを継ぎ分け、温めたカツをそれぞれに盛る。
秀夫、カツの端を摘まんで食べる。
和男「あ、つまみ食いは懲役３年」
よしこ「チョウエキってなに？　」

和男「冗談も解説がいりますねえ。
なんでもないよ。
さあ、運ぼう」

○同・居間（夜）
机にお粥の椀とサラダと麦茶のコップが並ぶ。
和男「いただきます」
あとの３人が唱和して食事が始まる。
食事を終えた和夫、ウィスキーの水割りを一杯。
和男「ここのところ毎日飲んでますけど、よくないなあ。
横浜にいるときは、２日に１回にしてたんだけど」
京子「気苦労させた私のせいで・・・」
和男「いやあ、ただの呑ン兵衛ですよ。
気にしないで。
気にされると、飲みにくくなっちゃう、

へへッ。
あ、思い出した。
保育所の先生がバザーに出す不用品は無いかって」
京子「あります。
もらったタオルセットが」
和男「じゃあ明日それを」
京子「ええ」
和男「風呂湧いてますから、子供たちと入ってください」
京子「ありがとうございます」

○山本家居間（朝）
テレビで朝のニュースを見ている和夫。
玄関の戸が開く音がして、京子の声。
京子「ただいま帰りました」
京子、部屋に入ってくる。
和男「保育所までの往復、疲れませんでしたか」
京子「ええ、最初歩くのも心もとなかったですが、ずっと歩き続けると気持ちが良くな

ってきました」
和男「そうですか。
それは良かった。
無理しないでくださいね」
京子「ほら、道端に咲いていました」
和男「コスモスですね。
もう秋だなあ」
小さな花瓶にコスモスを挿す京子。
和男「裏庭にもなんか咲いていましたよ」
京子「体を壊して、植えた花の手入れもできませんでした。
見てきます」

○同・裏庭（朝）
京子、ホースで花に水をやっている。
和夫、ふとん類を抱えて出てきて干す。
京子「ああ、私がやりますから」
和男「こんな力仕事は、まだしないほうがいい。
任せてください。
あとで洗濯だけやってみてください。

目が回るようなら、私が続きをやりますから」
京子「あなた、ほんとに優しいんですね」
和夫「そんなことないです」

○山本家・居間

少し涼しくなり、窓も閉めている。
和男「京子さん、少しお話があります」
手にした湯飲みを回しながら、机の向こう側に座っている京子に話しかける。
和男「あなたが退院して一週間、ここへお邪魔してから2週間近く経ってしまいました。あなたも大分体調が良くなり、顔色も見違えるほど良くなりました。あなた方が気がかりで、今日まで居続けてしまいましたが、よく似ているとはいえ、他人の和夫さんの奥さんと、一つ屋根の下に男が一人、住み続けることは、いかにも不自然です。私も、自分の家族が気がかりで、これ以上

ここにお邪魔することはできません。
これでお暇したいと思います」
京子の顔色が変わる。
机越しに手を伸ばし、和夫の手を握る。
京子「待って。
どうぞ行かないでください、お願いだから」
和夫、驚いて、
和男「しかし」
京子「せめて、せめてあの人が帰るまで」
和男「あなたの和夫さんがいつ帰ってくるか
分からないのに」
京子「いえ、もうあの人は帰ってこなくて
いいです。
あなたさえ居てくれれば」
和夫、慌てる。
和男「一時の感情でものを言ってはいけません。
あなたと和夫さんとの間には、十年近くの
歴史が厳然としてあります。
それを捨てるというのですか？」
京子「あなたのほうがいい、あなたのほうが」

和男「冷静になりましょうね、冷静に」
と、そのとき玄関の呼び鈴が鳴る。
京子「あの・・・、あなたの知らない人が来たのなら、会わないほうがいいです。
寝室に隠れててください」
和夫「ああ、そうですね」
和夫寝室に入り、襖を閉める。

○同・玄関（朝）
下村達夫（３２歳・出版社の編集委員）
「ごめんください」
京子、玄関の戸を開ける。
下村「こんにちは」
京子「ああ、下村さん。
どうぞお上がりください」
下村「はい、じゃあ」
下村、きれいに靴を脱ぎ廊下へ。

○同・居間

座布団を一枚、奥から持ってくる京子。
京子「さあ、どうぞ」
下村「ええ、では」
京子、台所からコーヒーを持ってくる。
京子「ミルクはありませんけど、どうぞ」
下村、角砂糖を２個入れる。
下村「どうもすみません。
ところで先生はお帰りですか？　」
京子「いえ、まだ」
下村「それは困ったなあ。
もう原稿の締め切りは過ぎてるのに」
京子「いつもすみません。
今回取材旅行が長すぎます」
下村「先生は携帯持っていらっしゃるけど、
いつも電源切ってしまって。
こちらのお家にも電話が通じなくて」
京子「３か月前から電話を手放してしまった
ので、ご迷惑をおかけしました」
下村「それでね。奥さん。
先生のパソコン覗かせてもらうわけにはい

きませんか？　」
京子「いや、それは」
下村「やっぱりだめですよね。
原稿があれば頂いて帰ろうと思ったのですが
えーっと、たばこいいですか？　」
京子「すみません。
そこの戸から裏へ出て、外でお願いします」
下村「ああ、はい。
じゃ、ちょっと失礼して」
下村立ち上がり、裏の戸口へ。
京子、後を追って出てゆく。
履物を勧める京子の声。
京子、部屋へ帰って来て、寝室へ。

○寝室

和夫の傍へ寄って来て、彼のYシャツに鼻を近づけて匂いを嗅ぐ。
次に彼の口元の匂いをも嗅ぐ。
和夫の心臓の鼓動がドキンドキンと早まる。

京子の心臓の音も。

京子「（小さな声で）タバコ、タバコでした。なぜ気が付かなかったんだろう。あなたはやっぱりあの人ではありません。あの人は、１日に２箱たばこを吸っていましたもの」

京子は彼の胸に手を添えて、彼を見つめる。

彼が、堪らなくなって、彼女を抱きしめようとしたとき、裏の戸の開く音が。

咄嗟に離れる二人。

○同・居間

襖を閉める京子。

下村、部屋に入って来て、座ってコーヒーを飲む。

京子「あの、・・・しばらく時間を下さい」

下村「そう、そうですね。

すぐにというのは無理でしょうね。

じゃ、完成したら連絡いただけますか？」

京子「はい」
下村「じゃ、失礼します。
先生によろしく」
と立ち上がり、玄関へ向かう。
京子、立ち上がり、見送りに。

○同・居間
下村が出て行ったあと立ち尽くす二人。
どちらからともなく抱き合う。
京子が和夫のYシャツのボタンをはず
そうとしたとき、
和夫「このままで。
このままでいいんです。
これ以上は・・・」

玄関が開く音とともに
秀夫の声「ただいま」
二人、体を離す。
秀夫、部屋に入って来てランドセルを
投げ出し台所へ。

和夫「今日は午前中授業か。
忘れてた」
京子「秀ちゃん、ビスケットあるから」
秀夫「うん」
秀夫、台所からビスケットを
頬張りながら入ってくる。
京子「でもあんた、給食食べたんでしょ？」
秀夫「これは別」
秀夫、座り込んで、残った水筒のお茶
を飲む。

T（翌朝）
○同・居間
京子「今日から、お姉さんの店へ出ます。
いつまでもダラダラしてる訳にもいかない
から。
よしこを送ってそのまま行きますから」
和夫「そうですか。
くれぐれも気をつけるんですよ。
苦しくなったら帰ってきなさいよ」

京子「ええ」
和夫「それから・・裸で失礼ですが、
これを持って行って」
と数万円の金を渡す。
京子「こんなこと」
和夫「いいんですよ。
下宿代だから」
京子「すみません」
洗面所から出てくるよしこ。
よしこ「お母さん、行こう」
京子「うん。
あなた、今日車使う？」
和夫「いや、使いません」
京子「そう。
じゃ乗ってくわね」
和夫「うん」
二人出てゆく。
和夫も後を追う。
○山本家玄関の外（朝）

二人を乗せた車がゆっくり出てゆく。
和夫、その車に深々と頭を下げる。
和夫「横浜に帰ってきます」

○新幹線の車内
和夫の声『一度横浜の家へ帰ってきます。
２、３日内に必ず帰ってきます。
この二重生活をいつまでも続けられるわけ
はありませんから、今後のことを決めて
きます。
しばらく待っていてください。
箪笥の引き出しにお金入れておきます。
私になにかあったら、それを使って生活を
立て直してください』
和夫、コーヒー缶を傾けながら、車
窓の景色を眺めている。
和夫M「ここでまた跳んだら困るけど・・・」

○ＪＲ新横浜駅タクシー乗り場
和夫、タクシーに乗り込む。

○タクシー車内

運転手（５５）「どちらまで」

和夫「洪福寺松原商店街まで」

運転手「あの、どのあたりですかね」

和夫「え？　ああ、保土ヶ谷区富田あたり」

運転手「はい、わかりました」

すぐカーナビをセット。

車は動き始める。

２０分ほど進むと、急に車が渋滞に巻き込まれる。

和夫「動かないね」

運転手「すみません、事故みたいで」

和夫「ここで降ります、近いから」

運転所「そうですか、はい」

○道路縁

タクシーは止まり、和夫降りてくる。

そのまま南に向かって歩き出す。

しばらく行くと四つ辻に差し掛かる。

和夫M「え？
無い。
私の店が！
私の店が花屋になっている」
和夫、向こう正面の花屋を凝視。
しばらく茫然と立ち尽くす。
四つ辻の手前の角に喫茶店。
向こうの斜め角にクリーニング店。
右向こうの角に理髪店。
もう一度、周囲の街並みを見回す。
和夫「ここだ、ここで合ってるが・・・」
再び花屋の方を伺う。
和夫、喫茶店に入る。
和夫、花屋の見える席に座る。
ウェイトレス（４８）が水を運んでくる。
和夫「コーヒーを下さい」
しばらく待つとコーヒーが運ばれて
くる。
和夫「ちょっと聞きますけど、あの花屋さん
のご主人、山本さんとおっしゃいません

でしたか？　」
ウェイトレス「いいえ、あそこは田中
さんですよ」
和夫「ああ、そうですか。
最近開店なさったんですか？　」
ウェイトレス「いいえ、もう２０年ちかく
前ですよ、開店は」
和夫「ああ、そうですか。
じゃ、私の勘違いだ。
すみません」
ウェイトレス「いいえ」
それでもまじまじと花屋を見つめる。

○喫茶店の外
和夫M「ここは違う世界だ」
花屋に深く頭を下げて、交差点の反対
側へ歩いてゆく。
通りかかったタクシーを止めて乗車。
車は新横浜方面へ。

○ＪＲ身延線鰍沢口駅・外観（夜）
呼んだタクシーに乗り込む和夫。
タクシーは走り出す。

○山本家外観（夜）
タクシーが止まり、２つの紙袋の荷物とともに和夫降りる。
和夫「悪いが、５分くらい待っててくれませんか？」
タクシー運転手（６２）「はい」
玄関の明かりは点いている。
和夫、玄関の呼び鈴を押す。
和夫M「さあ、誰が出てくるのだろう。怖いな」
バタバタと廊下を駆ける音。
ガチャガチャと錠を外す音。
開いた戸口に京子の姿。
京子「あなた！」
和夫「本物の和夫さんは帰ってる？」
京子「いいえ」

和夫、タクシーに近寄り、
和夫「どうもすみません。
居ました」
一礼して玄関へ。
玄関には子供たちの姿も。
和夫、玄関から入る。

○同・玄関内（夜）
よしこ・秀夫「お父さん、お帰り」
和夫「ああ、ただいま」

○同・居間（夜）
4人入ってくる。
目敏く荷物を見つけた秀夫。
秀夫「お父さん、それなに？」
和夫「ああ、これはお土産。
これは、秀ちゃん。
これはよしこちゃん」
よしこ「なになに！」
二人、お土産に飛びつく。

秀夫が包装紙を破ろうとする前に、
和夫「お店の人が、丁寧に包んでくれたんだ
から破いちゃいけないよ。
ほら、こうして開くんだ」
と、爪を立ててセロテープをはがす。
秀夫「やる、やる。
僕がやる」
と、セロテープを剥がしてゆく。
秀夫「うわあ、お父さん、これなに？　」
和夫「そこに書いてあるだろ。
キッズ・ツール・セットって。
君が工作をするための道具だよ」
箱の中のケースを取り出し、それを開
けると、ミニチュアサイズの、ドリル
やのこぎりなどが、ぎっしり詰まって
いる。
秀夫「すごい！。
お父さん、すごい」
それを見ていたよしこが
よしこ「私のも！　」

京子、包装を解いてやる。
京子「まあ、リカちゃん人形！
母さん、これ欲しい」
よしこ「だめよ、私のだから」
と、母親を睨みつけて横に抱えなおす。
簡単にプラスチックのケースを開き、
人形を取り出す。
よしこ「うわあ、きれい！　」
京子「きれいでしょ。
腕も足も動くのよ」
よしこ「お父さん、ありがとう」
京子「ほんとに気を使わせて・・・」
和夫「いや、なに。
喜んでくれたら、それが一番うれしい。
あ、そうそう」
とショルダーバッグからもう一つ包装
された品物が。
和夫「これはお母さんに。
もうちょっと太らないといけないから」
京子、包装を解くと横濱ミルフィーユ

が出てくる。
京子、目頭に手を当てて、言葉なく
頭を下げる。
京子「あ、ごはんまだでしょう。
ちょっと待ってね」
と、台所へ立つ。
しばらくして、魚の煮つけと、野菜炒
めと、卵スープとごはんが。
和夫「みんなごはん済んだの？」
京子「ええ、もう頂きました」
和夫「そう、美味しそうだな」
と箸を取る。
子供たちはお土産に夢中。

○同・書斎（深夜）
和夫、水割りを飲んでいる。
戸が開いて、京子入ってくる。
和夫「子供たち、寝ましたか？」
京子「お土産を抱いて寝てます」
和夫「ああ、そう」

笑ってしまう和夫。
京子「あの、おうちの人と会えました？」
和夫「いや、会えなかった。
それどころか私の店が花屋に変わっていました」
京子「ええっ？」
和夫「不思議です。
一瞬背筋が凍りました」
京子「まあ」
和夫「私には家が無くなってしまいました。
帰ってきちゃあいけなかったのかも・・」
京子「いいえ、おうちの人には悪いけど、
帰ってくれてよかった。
1日中心配してました」
和夫「他に帰るところがなかったから」
京子「ここがあなたの家です」
和夫「そう言う訳にはいかない。
今すぐにでも、和夫さんが帰ってくるかもしれませんから」
二人、言葉が見つからず、しばらく下

を向いて。
そしてどちらからともなく抱き合う。
和夫「こんなことをすればするほど、あなたを苦しめることになる」
京子「いいえ・・・いいえ」
外は雨が激しく降り出す。

○同・居間（朝）
和夫、京子とお茶をすすりながらテレビを見ている。
そのとき玄関の呼び鈴が。
京子「ここに居てくださいね」
京子、小走りに玄関へ。
しばらくして京子が戻ってくる。
和夫「誰だったんですか？」
京子「・・・警察の人でした」
和夫「え？　警察？」
京子「あの人が見つかったんです」
和夫「あの人って、和夫さん？」
京子「ええ」

和夫「どこに居たんです？　」
京子「岡崎、愛知県の」
和夫「なんでまた」
京子「歩道に横たわっていたところを発見さ
　れて、今は警察署に」
和夫「・・・」
京子「保護しておけるのは、今日の午後８時
　まで。
　できるだけ早く来て欲しいと」
　　和夫、言葉もなく、顔をこする。
和夫「行かないといけませんね」
京子「ええ、そうなんですけど・・・」
和夫「あなたは、ここで子供たちと待ってい
　てください。
　私が連れて帰りますから」
京子「え？　」
和夫「だって、秀ちゃんはもう学校に行った
　し・・・。
　子供たちを岡崎まで連れて行くのは・・・・。
　子供たちにはあなたが必要ですし」

京子「でもあなたは・・」
和夫「そう、ご主人とそっくりですよね。
・・・・・。
だから、双子の弟だとごまかします」
京子「そんな」
和夫「それしか方法がありません。
早速今から出かけます。
和夫さんのいるのはどこですか？　」
京子、手に持っていたメモを渡す。
和夫「岡崎警察署、分かりました。
京子さん、今からはしっかり心構えをする
んですよ。
駅まで車で送ってもらえますか？　」
京子「ええ、でも」
和夫、立ち上がり、ネクタイを締め、
壁に吊るした背広を羽織る
京子、洗ったハンカチを渡す。
和夫、京子の目を覗き込む。
和夫「大丈夫ですか？　」
京子「（硬い表情で）はい」

よしこ、トイレから出てくる。
よしこ「おかあさん、保育所行こう？　」
○ＪＲ新幹線車内
和夫、ショルダーバッグを抱えて車窓を眺める。
車内放送の声「間もなく三河安城です。
降り口は左側です。
東海道線はお乗り換えです。
三河安城を出ますと、次は名古屋に停まります」
立ち上がる和夫。
○三河安城駅前のレンタカー会社前
社員に案内されて和夫、一台の車の前へやってくる。
鍵を渡されて、車に乗り込む和夫。
カーナビを岡崎警察署にセット。
女性社員「どうぞご無事で」
と頭を下げる。

和夫、会釈して発進。

○岡崎警察署・駐車場

和夫、降りて署の入口へ。

○警察署・受付窓口

和夫「すみません。

山本和夫と言うものが、保護されていると

聞いてきましたが」

受付署員（４８）「山本さんですか。

ちょっと待ってください」

と、キーボードにタッチ。

受付署員「ああ、いらっしゃいました。

ご案内します。

山田君、ここを頼むよ」

と隣の署員に行って、歩き出す。

後に続く和夫。

○同・保護室

ドアを開けて、二人が入ってくる。

そこには、もう一人の山本和夫が、ぼんやりと座っていた。
髪はぼうぼう、髭も伸び放題。
着衣は薄汚れて。
受付署員「え？
あんたがた、そっくり！　」
和夫「ええ、双子です」
受付署員「へえ、そうなんですか。
なるほど。
じゃ、持ち物の確認をしてください」
と、傍らのリュックサックを開く。
和夫、中をザッと見る。
中の財布を開き、免許証を見つける。
確かに（山本和夫）と書かれている。
和夫「はい、確かに兄です。
よかった」
受付署員「我々もそれを見つけて照会したところ、失踪届が出ていましたので連絡しました。
あのー・・・」

和夫「何でしょう」
受付署員「この人は、ご自分の名前を憶えて
いません。
そしてご家族のことも受け答えできません。
それ以外の会話はできますが。
至急、心療内科に受診なさったほうがいい
です。
車にはねられたとかの痕跡はありませんが」
和夫「分かりました。
あと、なにか手続きは？　」
受付署員「これにサインしてください」
と1枚の書類を渡す。
和夫、椅子に座り、ざっと読んで。
署名する。
和夫「有難うございました。
じゃ、これで失礼します」
受付署員「はい」
和夫「あの・・・、だいぶん風呂に入ってない
ようなので、入れてやりたいと思いますが、
近くに温泉などありますでしょうか？　」

受付署員「ああ、それなら（ホテル葵の湯）
ですね。
すぐ近くですから」
和夫「（葵の湯）ですね。
ありがとうございます」
さあ、兄さん、行こう」
と、京子の夫の手を取る。

○ホテル葵の湯・駐車場
和夫のレンタカーが入ってくる。
和夫「さあ、風呂に入ろう」
『以後、京子の夫の和夫を、兄と表記します』
和夫、兄を促して、自分のショルダーバッグと、京子から託された衣類のバッグと、兄のリュックを手にする。
兄、ゆっくり車外へ。
二人はホテルの入口へ。

○同・湯舟

和夫「兄ちゃん、体と頭洗うんだよ。
後で床屋へ行くんだから」
兄「うん、そうか。
じゃ洗おう」
兄、壁の鏡の前で洗い始める。
和夫「兄ちゃん、背中流すよ」
兄「あ、すまん」
和夫、兄の背中を擦ってゆく。

二人が湯舟に浸かっている。
和夫「兄ちゃん、気持ちいいだろう」
兄「うん、気持ちいい」
和夫「風呂は久しぶり？　」
兄「そう・・・多分」
和夫「兄ちゃん、自分の名前、覚えてないの？　」
兄「うん。
あんたは俺の弟？　」
和夫「そうだよ」
兄「俺に弟がいたことも覚えてない」
和夫「姉ちゃんの名前は？　」

兄「さあ・・・」
和夫「寿美子だよ、弁当屋の」
兄「あ、
弁当屋は覚えている」
和夫「それは知ってるんだね。
じゃ、あんたの奥さんの名前は？　」
兄「わからない」
和夫「なんで名前を忘れたかも忘れたの？　」
兄「もう聞かないでくれ。
俺にもわからないんだから」
和夫「そうだね。
記憶喪失の大部分は治るとか聞いたことがあるし。
まあ、焦らずにいこう」
二人、そのまま黙って湯に浸かる。

○ホテルのロビー
二人は、浴衣でカウンターへ近づく。
支配人（７１）「はい、なんでしょう」
和夫「このあたりに床屋ありませんか？　」

支配人「ここを出て１００メートルほど西へ
歩けば一軒ありますよ」
和夫「ああ、そう、ありがとう」
そうして二人は出てゆく。

○同・食堂（夜）
和夫「兄ちゃん、頭を刈ってもらって
さっぱりしたね。
髭もなくなったし」
兄「うん、気持ちがいいよ。
あの、かかった金、後で払うから」
和夫「いいんだよ、そんなの。
まあ、一杯行こう」
和夫、兄のコップにビールを注ぎ、
さらに自分のにも満たす。
和夫「元気でよかったよ。
乾杯！」
兄「乾杯！」
そして食事を始める。
和夫「兄ちゃん、自分が小説家だってこと、

知ってる？　」
兄「小説家・・・、さあ」
和夫「身延に帰ったら、病院で見てもらおう」
ビールを注ぐ和夫。
うまそうに飲む兄。
そして料理に箸を。
兄「これ、うまいな」
和夫「それは味噌カツ。
名物だよ。
ほら、椀の中のうどんみたいなやつ、
きしめん。
これも名古屋名物」
兄「ほんとかい？　」
和夫「ほんとだよ。
ほら、うまいだろ？　」
兄「うん」
和夫「ごはん、お替りする？　」
兄「うん」
和夫、カウンターのジャーのところで
兄のごはんをよそう。

○二人の部屋（夜）

和夫、冷蔵庫からウィスキーの小さな
ボトルを２本取り出し、１本を兄に渡す。

和夫「飲めるよね、ウィスキー。
あんたは私なんだから」

兄、キャップを取り、一口飲む。

兄「うまい！　」

和夫「そうだろ」

兄、残りを一口で飲んでしまう。

和夫「そんなに一気に飲んじゃいけないよ」

兄「そう？　」

和夫「そうだよ。
悪酔いするよ」

兄、自分で冷蔵庫を開けて、もう一本。

和夫「仕方ないなあ」

そうして３本目を開けたとき、

兄「眠い、もう寝る」

とベッドに潜り込む。

和夫、部屋の明かりを落とし、トイレへ

和夫、携帯を取り出し、京子へ掛ける。
京子「はい」
と小さな声。
和夫「子供たち、どうしてます？　」
京子「テレビを見てます」
和夫「今、話せる？　」
京子「ちょっと待って。
書斎へ行きますから」
畳を踏む音と、戸を開けて閉める音。
京子「はい」
和夫「無事に和夫さんを引き取って来ました。
今は岡崎のホテルに泊まっています。
軽い記憶喪失のようです」
京子「まあ」
和夫「だけど、日常生活には不便はないようです」
京子「でも・・・」
和夫「明日、昼ごろ帰ります。
子供たちはまだ帰っていないし、あなたも
弁当屋で仕事中だから、誰にも逢わずに

送り届けられます」
京子「そんな・・・」
和夫「そのほうがいいです」
京子「あなたは？　」
和夫「私は、家に上がりません。
子供たちが帰ってきたら混乱しますし」
京子「和夫さんをどうしたらいいでしょう」
和夫「携帯で心療内科を探したら、市民病院
にありました。
明日朝連れて行って受診させます」
京子「・・・」
和夫「あ、それとお金の話ですが」
京子「ほんとにすみません。
何から何まで出させてしまって」
和夫「いや、そうじゃないんです。
きのう、和夫さんのリュックを開けたら、
貯金通帳が２通出てきて、その預金額が
それぞれ一千万以上あるんです。
これだけあったら、当面あなたが困らなか
ったのにと、驚くやら、呆れるやら」

京子「そんなに・・・」
和夫「和夫さんは、月々いくらとあなたに渡
　していたんですか？　」
京子「ええ」
和夫「それが間違いのもとだ。
　通帳とカードと印鑑をあなたが管理する
ようになさい。
　和夫さんは病気なので、間違った使い方を
してしまうといけないから」
京子「そうですね。
　あ、それだけあったら、あなたからお預か
りした３００万円、お返しします」
和夫「いや、それは持っていてください。
　どんなに倹約しても、月１５万から２０
万は必要です。
　あなたが働いていてもですよ。
　ざっと計算して１５年しか持たないです」
京子「１５年・・・」
和夫「秀ちゃんが大学を卒業して２３歳。
　よしこちゃんの学費は出てこないから

あなたがしっかりしないと。
姉の寿美子みたいに強気で・・・」
京子「そうですね。
わかりました。
そうします。
ありがとうございました」
和夫「それと、私のことは忘れるんですよ。
和夫さんを私だと思って仲よくなさい」
京子「いいえ、それは・・・」
和夫「二人の夫を愛するなんてできません。
あなたも私も狂ってしまいます。
このことは覚悟してください」
京子「・・・」
和夫「じゃ、明日の夜、和夫さんの診断結果
を報告します。
この時間に」
京子「はい」
和夫「じゃ、おやすみなさい」
そう言って和夫、電話を切る。
和夫M「辛いんだよ、私も・・・」

○山本家外観

和夫が兄を伴って帰ってくる。

鍵を開けようとすると、戸か開いている。

和夫「あれ？

閉めるのを忘れたか」

○同・玄関内

そのとき、京子が奥から出てくる。

二人の姿を見て驚く京子。

京子「お帰んなさい。

あの、どちらが・・・・」

和夫「こちらがあなたのご主人です。

兄さん、この人があんたの奥さん」

兄「初めまして・・・・」

京子「・・・・」

和夫「今日は仕事は？　」

京子「休ませてもらったの」

和夫「そう。

まあ、二人とも、もっとリラックス

して下さい。
さあ、兄さん、上りましょう」
兄の背を押して廊下に上がる和夫。

○同・居間
3人、座る。
和夫「秀ちゃんが帰ってくるといけませんから、手短に報告します。
兄さんは（解離性健忘）という病気で、良くなることもあるとのことです。
何かのストレスで発症するそうですが。
一番大事なのは、家族がそっと寄り添うことだそうで、あまり問い詰めないようにと先生が、おっしゃっていました。
薬ももらってきています」
と、薬の入った紙袋を京子に。
和夫「若年性認知症だと困ると思っていましたが、テストの結果では、そうじゃなかったので一安心です。
この説明でお分かりになりましたか？」

京子「ええ」
和夫「じゃ、私はこの辺で」
　と、立ち上がり
和夫「兄ちゃん、ゆっくりするんだよ。
　じゃあね」
兄「ありがとう」
　和夫、玄関へ歩き始める。

○同・玄関の外
　和夫、戸を閉め、歩き始める。
　戸が開いて、京子出てきて、和夫に
　すがる。
京子「あなた」
和夫「・・・さようなら」
京子「これっきりですか？　」
和夫「ええ、お会いするのは、これが最後です」
京子「そんな！　」
和夫「あなたの和夫さんは、心が真っ白な
　状態です。
　今から新しい家庭を築くのにいいチャンス

だと思います。
彼はタバコさえ欲しがりませんでした。
新しい和夫さんです。
幸い、あなたと私は、キスさえしていない。
ただ、ハグしただけですから。
今なら・・・・」
京子「・・・・」

と、その時、ライトバンが近づいて来る。
車には寿美子が。
裏庭に駐車して降りてきて話しかける。
寿美子「京子さん、大丈夫？
急に休んだから、また寝込んだかと思って」
京子「ああ、お姉さん」
寿美子「大丈夫なようね。
安心した！
なによ、和ちゃん。
そんなとこへ突っ立ったままで。
お茶ぐらいごちそうしてよ」
和夫「ああ、はい・・・・」

寿美子「さあ、行こう」
と二人の腕を掴んで玄関へ。
和夫と京子、顔を見合わせる。

○山本家・居間
和夫と京子を押すようにして、寿美子入ってくる。
寿美子、兄を見つけて
寿美子「ギャア！」
京子「お姉さん」
寿美子「なによ、この人！」
それより驚く兄。
兄「こんにちは」
寿美子「ええ？
どうなってるの？」
和夫「まあ、お姉ちゃん、とりあえず座って。
説明するから」
京子、台所へ下がりお茶を持ってくる。
和夫「じゃ、初めから説明します」
回っている扇風機にカメラはゆっくり

近づき、そしてゆっくり離れる。
（説明の時間経過の表現）

和夫「お姉ちゃん、この話信じられますか？」
寿美子「信じるったって。
ほんとなの、この話」
和夫「ほんとです。
あなたは、この人の姉であり、同時に
私の姉でもあるのです」
寿美子「こんなことって・・・」
京子「私も最初は、和夫さんが芝居をして
いるのかと思ってました。
でも、ほんとにこの人は私の夫ではありま
せん。
そっくりですけど」
寿美子「（兄に向って）あんた、どう思う？」
兄「よくわかりません」
和夫「さっきも言ったように、お兄さんは、
記憶喪失で取り分け人を覚えていません。
直すには時間がかかります。

お姉ちゃんも、この人を支えてあげてください。
御願いします」
寿美子、グイッとお茶を飲む。
寿美子「不思議なこともあるものね。
わかった。
あんたの言うとおりにするわ」
和夫「姉ちゃん、駅まで送ってよ」
寿美子「いいわよ、じゃ。
京子さん、しっかりするのよ」
二人は立ち上がり、玄関へ。

○同・玄関
和夫、振り向き、京子と兄を二人まとめて抱きしめる。
和夫「京子さん、いろいろありがとう。
二人とも元気でね」
二人は呆気にとられた表情。

○裏庭

寿美子のライトバンに乗り込む和夫。
寿美子、車を発進させる。
窓から和夫と京子に会釈する和夫。
車は本通りを直進。
和夫「お姉ちゃん、これからも二人をよろしくお願いします」
寿美子「言われなくても、ちゃんとやるから。横浜に帰ったら、たまには電話でも頂戴よ」
和夫「うん。
届くかどうかわからないけど」

○横浜の自宅へ向かうタクシー（夜）
清雅堂のあるはずの四つ角の手前で、
車は止まる。
和夫、降りて歩き出す。
しばらく行くと、なんと清雅堂が見える。

○清雅堂外観（夜）
店の前の駐車スペースには、和夫の車だけが。

和夫「良かった！
家があった！」
信号を待ってから、店に向かう。
店の戸を開こうとすると閉まっている。
しかたなく、玄関に回る。

○山本和夫の家の玄関内（夜）
和夫「ただいま」
玄関の錠をセットする。
靴を脱ぎ、ダイニングへ。

○同・ダイニング（夜）
栄子「あ、お帰り」
和夫「ふー。
ただいま」
栄子「なによ、おおきなため息なんかして」
和夫「うん」
栄子「朝出かけて一度も電話よこさないって、
あんたらしくないわ。
どうかしたの？」

和夫「え？　朝？
今日は何日？　」
栄子「ここはどこ？　私は誰？
へたな漫才のギャグね」
照彦「寒いギャグだよ、父さん」
と見ると、引きこもっているはずの長
男照彦がテーブルについている。
髪もツーブロックにきれいに刈っていて
髭も剃っている。
花「父さん、前からおかしかったけどね」
という花も黒い髪で、化粧は落として
いる。
和夫「違う！　ここも違う！　」
栄子「ごちゃごちゃ言ってないで、お座んな
さいよ」
栄子、棚から皿を取り、ごはんを
よそって、カレーを掛ける。
それを和夫の前に置き、スプーンと
ビール缶を並べる。
和夫、ビールをコップに注ぎ、一気に

飲んでしまう。
和夫「ほんとに大変だったんだよ」
栄子「なにが？　」
和夫「言っても信じないよ」
栄子「言わなきゃわからないわ」
照彦「どうでもいいや。
先に風呂入るから」
花「だめよ。
私が先よ。
兄ちゃん、汚いのよ。
体洗わず入るんだから。
垢が浮いてんだから」
照彦「じゃ、じゃんけん」
花「しょうがないわね。
ほら、ジャンケンポン！
わーい、勝った、勝った。
神様は若く美しい女性の味方なの」
と、部屋を出てゆく。
照彦「チェッ。
どこが美しいんだよ」

と、テレビのスイッチを押して、
和夫にはうるさいだけの、訳の分からない歌を我鳴る歌番組を。
和夫、照彦の横顔を見ながら
和夫「これでよかったのかも知れないな」
栄子「ほんとにどうかしちゃつたみたい。
熱でもあるの？　」
和夫「無いよ」
栄子「それより、大阪の丸山さんから電話で、
どうして今日のオークションに来なかったのかって。
あとで電話しといてよ」
和夫「うん」
栄子「ほんとにどうして行かなかったの？
掘り出し物があるって言ってたじゃない」
和夫「うん、いろいろあってね」
ゆっくりカレーのスプーンを口に運ぶ。

○同・屋根の物干し台（夜）
和夫、階段を上って来て、ネオンの

瞬く街並みを眺める。
携帯を取り出し、（京子）の宛先を
タッチする。
電話の声「この電話番号は使われておりません。
お確かめの上、お掛け直しください」
京子の電話番号を削除する和夫。
携帯を仕舞う。
和夫「これでほんとにお仕舞いなんだな」
おおきいため息をついて、階段を
降りる和夫。
空には星が、ネオンと輝きを競う夜。

終わり